



西日本新聞 文化欄

1988 年九月二十六日～十月八日

小品が一点だけ

「九州派展」が開幕した九月二十三日以来、オチ・オサムは連日、福岡市美術館に通っている。だが会場には“九州派の天才児”時代の作品は、ちっぽけな絵が一点あるきり。保管する場所がなく、九州派時代の作品が残っていないのだ。

だから同展の数カ月前から興奮して制作を続けた。元九州派が運営を任された近作コーナーで勝負するためだ。トレードマークと言える無数の球体が画面に浮かぶ油彩のほか、オフセット印刷を用いたベニヤ板大の作品五十一点で壁を埋め、オブジェ六点を 床に置いて完全に一室を独占した。

オチは、そんな会場をうろつく。「昔の九州派では、作品を並べた途端に皆に殺気が走り、一瞬で優劣が決まった。負けた!と感じた瞬間、翌年の作品の構想を練った」。「また、目いっぱい、描きまくる!」とうなる。酒にむしばまれて再起を危ぶまれた数年前のうつろな目は、もうない。

桜井に心酔して

九州派は桜井孝身(フランス)とオチの出会いが火種になって誕生したと言える。昭和三十年の二科展で、いきなり脚光を浴びたオチの才能にほれた桜井が接近、集団結成の機運が生まれたのだ。

九州派でのオチは、菊畑茂久馬(福岡市)とともに九州派の代表作家になる。美術評論家の中原佑介はオチを「反モダン・アートという主張をもっともよく具体化した作家」と評した。二十代前半の多感な青年は有頂天になった。同時に、引き立

ててくれる八歳年上の桜井に心酔する

「九州派の運動 はいつか日の目を見る、と言う桜井さんに、運動の意味も分からないままついていった」という。造反して飛び出したことがあるが、桜井とだけは接触を続けたし、すぐに復帰する。「桜井さんとは離れきらん」と思うようになった。

白日夢の世界へ

九州派が解体期に入る四十年に桜井はサンフランシスコに渡る。翌年、オチも追った。三十歳だったオチは「目的はなかった。ただ約束していたから」の渡米だった。日本レストランの皿洗いから始め、料理を覚えてからはコックをしながら絵を描いた。サンフランシスコでの二度目の九州派展(四十二年)に参加、四十三年には浦田宗夫(東京都) と二人だけで、三回目で最後の九州派展を開いている。

ヒッピーが群れ、反ベトナム戦争運動が渦巻くサンフランシスコで、オチも LSD の 洗礼を受ける。サイケデリックな幻覚の美を「絵として、どう深化させるか」を考え続けた。「あふれ出るような美しさ」を求めてまずチューリップを描いた。それが太陽に変わり、球体へと移っていった。

初めは球を一個ずつキャンバスに描いていたが、四十四年に帰国してからは、球の数が 次第に増えていった。「球は地球。地球を増殖させて人類も幸せになれるように」などと哲学的な意味づけもしてみたが「絵はきれいでさえあればいい」と思うようになる。そして、赤や矢、黄、緑など鮮やかに輝く大小の球体が宇宙空間に無限に広がるような「デイ・ドリーム」のシリーズが生まれ、今も続いて見る人を白日夢の世界に誘う。

新たな羽ばたき

そのオチに酒におぼれた悪夢の日々があつた。原因は経済的なことで「個展の売り上げと女房のパートで生活はできるのだが、ちょっと足りん。女房といさかいをしては酒を飲んだ」。美術雑誌でもてはやされた若い日とのギャップの深さに悩んだこともあつただろう。急速に酒量が増えた。ついには壁にすがっても歩けないほどになり、病院にかつぎ込まれ、八ヵ月間も入院することになった。

入院初期、意識がもうろうとした状態なのに色鉛筆や色紙を欲しがったことをあとで知った。大事にしていたリルケの詩集にいつの間にか意味不明の線を引いたり、チューリップを描いたりしていた。「オレは本当に絵が好きだった」と知り、酒のせいで描け なかった生活を悔やんだ。

六十年二月に退院。「完全回復までに女房が五年間の猶予をくれた」。百三十号の大作を二十枚描く決心をした。 今、五枚完成。自分でも驚く回復ぶりだ。

(吉田 浩記者)
九州派展 10日まで、福岡
市中央区大濠公園、福岡市美
術館。